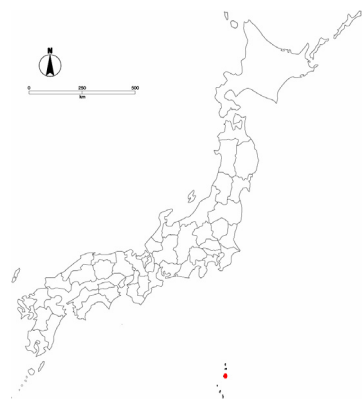


21.オカサワアブラコウモリ <i>Pipistrellus sturdeeii</i> Thomas,1915		環境省 EX
写真無し	写真無し	
	写真無し	
<u>分布</u> 19 世紀に小笠原諸島において採集されたとされる模式標本が 1 頭残るのみである。環境省が 1991 年および 1998 年に発表したレッドリストにおいて絶滅種としてあげられている。		
<u>形態</u> 模式標本は前腕長 30 mm、頭胴長 37 mm、尾長 31 mm。		
<u>生態</u> 不明。		
参考文献 1)、7)、49)		

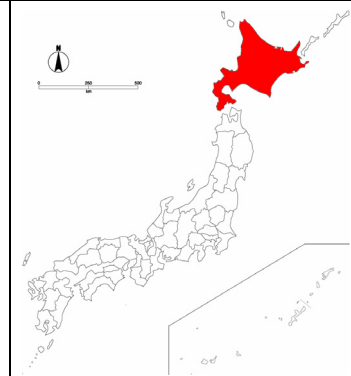
22. キタクビワコウモリ *Eptesicus nilssonii* Keyserling&Blasius, 1839

環境省 EN



分布

北海道に分布する。



形態

前腕長 38～43 mm、頭胴長 55～65 mm、尾長 35～43 mm、体重 8.0～13.0 g。体毛色は茶褐色で、背面に金属光沢の粗毛を持つ個体が多い。

生態

昼間は樹洞を休息場所として利用するとされる。建造物の壁板の間で繁殖している例も知られる。一年に一度、初夏に 1 仔を出産する。街頭の周囲に集まる昆虫を採餌するため繰り返し飛ぶ姿が見られるように、やや開けた場所を飛翔する傾向も伺える。

参考文献 1)、10)、49)

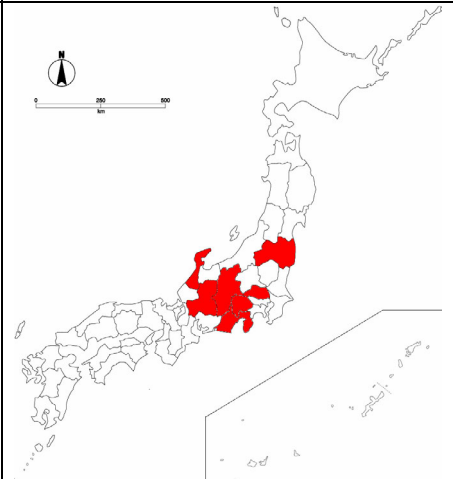
23.クビワコウモリ *Eptesicus japonensis* Imaizumi,1953

環境省 EN



分布

日本固有種で、北海道、本州に分布する。長野県で唯一の繁殖集団が見つかった。また、島嶼では石川県舩倉島で確認記録が一例ある。



形態

前腕長 38～43 mm、頭胴長 55～65 mm、尾長 35～43 mm、体重 8.0～13.0 g。体毛色は黒褐色で腹面がやや淡い。前面から見た時にこの淡い部分が首輪状に目立つため名付けられた。背面に金属光沢の粗毛がみられる場合もある。

生態

昼間は樹洞で休息するとされるが、樹木におけるねぐらは知られていない。出産・哺育集団は家屋での例のみが見つかった。夏に雌だけの出産・哺育集団を形成し、1仔を出産する。出生後約1か月で幼獣が飛翔するようになり、秋までに家屋のねぐらから姿を消す。冬眠場所は見つかっていない。

参考文献 1)、2)、49)、61)、75)

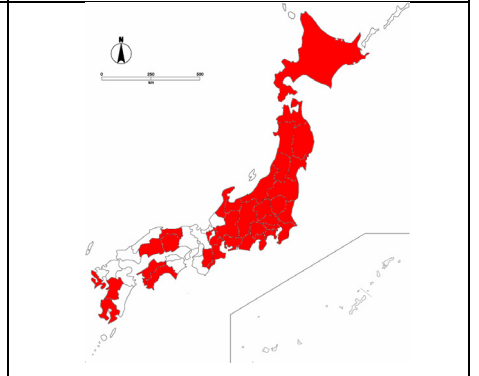
24. ヤマコウモリ *Nyctalus aviator* Thomas, 1911

環境省 VU



分布

北海道、本州、四国、九州、対馬に分布する。一部の地域以外では個体数が激減していると言われる。



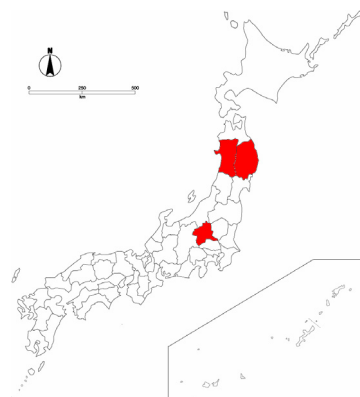
形態

前腕長 57～66 mm、頭胴長 89～113 mm、尾長 51～67 mm、体重 35～60 g。大型のコウモリである。体毛色は光沢のある濃褐色から赤褐色。幼獣の体毛色は黒味が強い。

生態

昼間の休息場所は樹洞を利用する。夕方に覚醒後長時間グルーミングをおこなうと共に、盛んに声が聞こえ、日没頃から外に採餌に出る。高空を高速で飛び、ねぐらからの一晩の行動範囲は数キロにわたり、河川上空、農耕地、森林上空、市街地上空と幅広い。年間を通じて 100 頭以上が利用する樹洞のほか、冬眠期以外のみに利用するねぐらでは、春に雌雄混在していても出産期の開始と共に雄が減少し、雌ばかりの 20～50 頭程度の集団となる。一年一回、初夏に 1～2 仔を出産し、幼獣が飛翔するようになると雄は再び戻る。冬眠に利用される樹洞では雌雄共に秋に集合し、樹洞内の同部位を利用して冬眠し、春に分散する。可聴音から超音波にまたがる低いエコーロケーションパルスを発する。コウモリとしては大型で歯が鋭く咀嚼力も強いが、小鳥に樹洞を追い出されることもある。

参考文献 1)、2)、13)、15)、16)、17)、18)、21)、22)、23)、24)、25)、27)、29)、31)、32)、33)、40)、41)、45)、49)

25.コヤマコウモリ <i>Nyctalus furvus</i> Imaizumi&Yoshiyuki,1968		環境省 EN
写真無し	写真無し	
	写真無し	
分布 本州で記録がある。		
形態 前腕長 48～53 mm、頭胴長 76～84 mm、尾長 46～54 mm。体毛色は黒褐色。		
生態 昼間の休息には樹洞を利用されている。		
参考文献 1)、2)、15)、16)、23)、49)、62)		

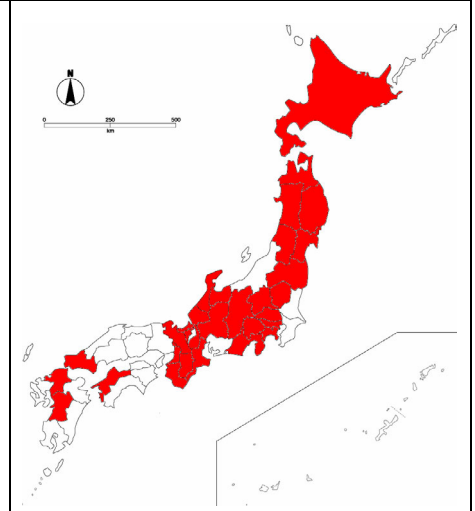
26. ヒナコウモリ *Vespertilio sinensis* Peter, 1880

環境省 VU



分布

北海道、本州、四国、九州に分布する。



形態

前腕長 47～54 mm、頭胴長 78～80 mm、尾長 35～50 mm、体重 14.0～30.0 g。体毛色は黒褐色で、背面上毛の先端部分に銀灰色の光沢を持つ毛が密生するため、全体的に銀色のイメージにとらえられる。

生態

昼間は樹洞を休息に利用する。このほか、出産・哺育場所として家屋や海蝕洞を利用している例も知られ、その規模は数百頭以上の集団に達することもある。一年に一度、初夏に 1～3 仔を出産する。出産哺育の場所と冬眠場所は異なる事が多く、あまり大きな越冬集団はみつからないが、出産哺育コロニーで標識された個体が長距離移動した例もあり、季節的な行動範囲は広いとも考えられている。近年、都市部での集団が見つかる例が相次いだ。また、秋期には休息に建築物を利用する例がしばしばある。

参考文献 1)、2)、13)、15)、16)、17)、18)、21)、23)、24)、25)、27)、29)、31)、33)、36)、37)、38)、41)、48)、49)、52)、63)

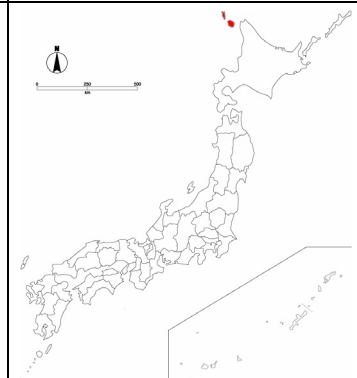
27. ヒメヒナコウモリ *Vespertilio murinus* Linnaeus, 1898

—



分布

2002 年に北海道で初めて記録された。これ以降に、北海道、本州で3例が見つかったのみである。現在のところ、気象条件によって、シベリア方面から飛来した偶産種ではないかと考えられている。



形態

前腕長 42～46.5 mm、体重 12.0～21 g。体毛色は黒褐色系であるが腹面が淡くキタクビワコウモリのようなコントラストがある個体も見られた。刺毛の先端が銀白色で全体にはヒナコウモリ体毛色に似るが、やや小型である。

生態

これまでに捕獲された例自体が少なく、日本での詳細な生態は不明である。

参考文献 1)、2)

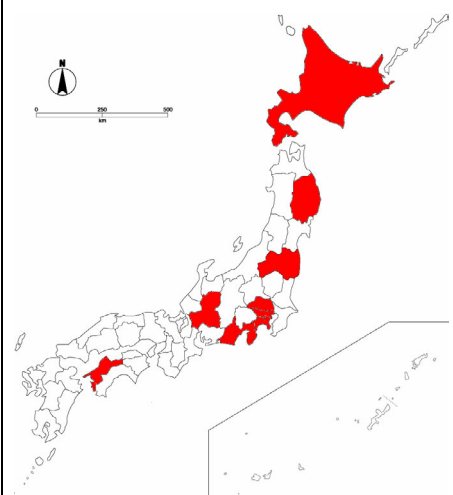
28.チチブコウモリ *Barbastella leucomelas* Cretzchmar,1826

環境省 VU



分布

北海道、本州、四国に分布する。しかしながら北海道以外で記録された個体数は極めて少ない。



形態

前腕長 39～44 mm、頭胴長 50～63 mm、尾長 43～54 mm、体重 8.0～12.0 g。体毛色は褐色。背面に先端が薄い刺毛が見られることもある。¹⁾ 耳介は幅広く大型で、左右耳介の基部が額で結合しているのが特徴であり、国内でこのようなコウモリは耳介が長く簡単に区別がつくウサギコウモリ以外、他にいない。

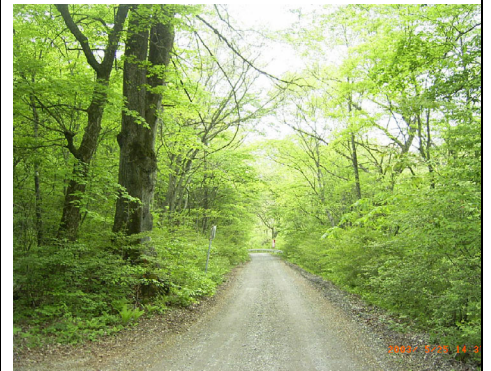
生態

昼間の休息場所として樹洞を利用する。単独個体として洞穴で見つかったこともある。洞穴での冬眠例もある。

参考文献 1)、2)、13)、15)、24)、25)、41)、49)、61)

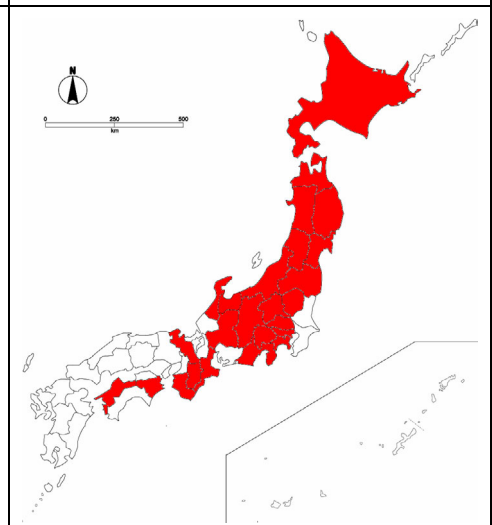
29.ウサギコウモリ *Plecotus auritus* Linnaeus,1758

環境省 VU



分布

北海道、本州、四国に分布する。



形態

前腕長 40～45 mm、頭胴長 42～58 mm、尾長 42～55 mm、体重 5.0～13.0 g。体毛色は淡褐色から灰褐色。耳介が非常に長く、他種との見分けは容易である。

生態

昼間の休息場所に樹洞を利用する。このほか、洞穴や物置といった人の気配が少ない家屋でもしばしば見られる。初夏に1仔を出産する。森林内の低層から中層をゆっくり飛行する姿が観察される事が多く、植物表面にいる飛行していない昆虫を採餌すると考えられている。洞穴での冬眠例は開けたホール天井に下がっているほか、狭い隙間の奥に入り込んでいた例もある。冬眠時に耳介を後方側面に倒すように畳むため、耳珠のみが前方に突き出るように見えることもある。

参考文献 1)、2)、15)、16)、17)、18)、21)、23)、24)、25)、27)、31)、33)、41)、42)、49)

30. ユビナガコウモリ *Miniopterus fuliginosus* Hudgson, 1835

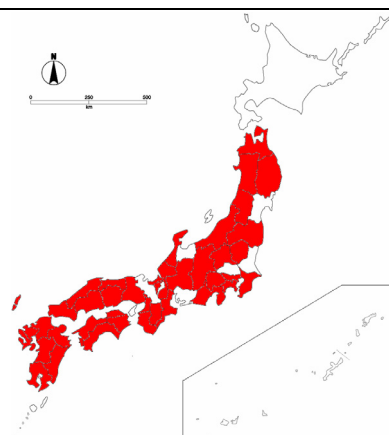
—



分布

本州、四国、九州、対馬、佐渡に分布する。

分布域は広く、大集団で見つかることも多いが、出産が確認されている場所は極めて少なく、秋田、新潟、福井、岐阜、和歌山、島根などでそれぞれ 1～2 ヶ所程度である。



形態

前腕長 45～51 mm、頭胴長 59～69 mm、尾長 51～57 mm、体重 10.0～17.0 g。体毛色は褐色～赤褐色で、翼のシルエットは狭長型である。

生態

昼間の休息場所には自然洞のほか廃坑など多様な人工洞を含めた洞穴を利用する。季節的な移動をおこなうことも確認されており、冬眠期と出産期にはそれぞれ適した洞穴に集合して数百～数万頭の集団を形成する。小規模な生息洞の間で相互に移動が見られ、その移動範囲は 100～200km 以上の範囲に及ぶ例が知られている。本種は狭長型の翼を持ち、高速で長距離を持続的に飛ぶ能力があるため、樹冠上、河川上空など開けた場所で飛翔昆虫を採餌する。初夏に 1 仔を出産し、幼獣は生後約 30 日で飛翔を始めると哺育洞から速やかに姿を消し始める。雌は満 1 歳の秋以降に性成熟して繁殖に参加し始めると言われている。

参考文献 1)、2)、15)、16)、17)、24)、25)、31)、33)、36)、37)、38)、40)、44)、47)、50)、57)